

目次

ページ

特別講演会	・景色と景色づくりについて考える:樋口忠彦氏	1
中四国リレーシンポジウム	・水と緑、歴史的資産を活かした都心づくり(岡山市)	4
	・水辺の空間活用とまちの魅力・元気づくり(徳島市)	5
第3回学術講演会	・総合的な学習の時間を活用したまちづくり教育の実践	6
第1回都市計画研究会	・広島市京橋川の水辺と取組み等	8
第2回都市計画研究会	・呉市 蔵本通り(屋台)及び周辺を取組	9
第3回都市計画研究会 (特別講演会)	・中心市街地活性化の第二ステージを探る:藻谷浩介氏	10
第2回幹事会		11
ホットコーナー	・メキシコ紀行 福馬晶子氏	12
会員紹介	・福田由美子氏	16
今後の活動計画		16
都市計画サロン募集		17
編集後記		17

特別講演会 美しい国の遺伝子を探る

テーマ:「景色と景色づくりについて考える」

日時:平成19年7月28日(土) 15:00~17:00

場所:広島市まちづくり市民交流プラザマルチメディアスタジオ

講演者:樋口忠彦氏(広島工業大学環境学部教授)

主催:都市計画学会中国四国支部(企画・研究委員会)

後援:日本建築学会中国支部、土木学会中国支部

参加者:80人 広島県建築士会

樋口忠彦氏 略歴

1944年埼玉県生まれ。東京大学工学部土木工学科卒業、同大学院工学研究科博士課程単位取得退学。新潟大学工学部建設学科教授、京都大学大学院都市環境工学専攻景域環境計画学教授を経て、現在、広島工業大学環境学部教授。都市計画学会石川賞、サントリー学芸賞、土木学会著作賞、建築学会賞(業績)などを受賞。著書に「景観の構造」「日本の景観」「郊外の風景」「都市のデザイン(共著)」など

今年京都大学を退官され、4月に広島工業大学に着任された、景観構造分析の先人、樋口忠彦氏をお迎えし、「景色と景色づくりについて考える」と題して講演いただきました。

氏は1995年9月当時の広島市の政策「ひろしま2045ピース&クリエイト」連続講演会「都市広島をどう読むか。私の都市解釈学」において、「都市の雑種性について」と題して講演されています。コルビジェに代表される進歩主義の都市モデル、ゴードン・カレンの「タウンスケープ」に気づかせられた経験主義の都市モデル、美学を重んじる

形式主義の都市モデルの三つの考え方を披瀝された上で、都市形成の過程やその構成構造を基に、雑種性(多様性)の存在から景観を論じられました。講演の最後に、ロバート・ベンチューリの言葉を引用して、「全体を構成する、互いに衝突し合う要素が、かろうじて制御されており、混乱の一手手前でありながらも、かえってそれゆえに活力がもたらされている、そのような統一なのである。」という考え方を支持し、複雑な統一を生かして魅力的な都市づくりを進めていただきたいと結ばれました。あれから12年、今回は「景色」という言葉の我が国への伝来、表現の過程を通じて、人の目線での景色づくりについて語っていただきました。

1 景色と風景と景観



- ・「けしき(気色、景色)」・・・中国から伝わり、平安時代初期から用いられ、和語化していった語。「景色」と書かれるのは近世以降。
- ・「風景」・・・中国から伝わり、漢文体の資料に登場。明治以降一般化か?
- ・「景観」・・・Landshaft, landscapeなどの訳語で、学術用語。明治末期に生まれる。

2 景色をみんなのものに

- ・景色は、表現されることで、他人に伝えられる。
- ・景色は、表現されることで、景色になる。
- ・景色の表現から、景色の見方を学ぶことができる。

3 柳田國男「風光推移」の意義

柳田國男は、明治大正時代に新たに生まれた美しさの一つとして、「田園の新色彩」をあげている。

- ・日本海側で発明された赤色の瓦
 - ・桃李などの果樹の畑
 - ・木芙蓉・夾竹桃・百日紅などの夏の花の流行
 - ・野を拓いて生まれた麦畑
 - ・田園の色調を変化させた菜種の花や紫雲英の花
- 「都市の郊外などに少しの草花を育てる前に田舎はもう一様に花園に化せんとしていたのであった。」と書いている。

4 景色の育て方

- (1) 広島にはどんな「景色」が育ってきたのか、またどんな知られざる「景色」があるのか、皆で調べる。眺望対象と眺め愉しむ場所との両者をセットで調査する。この際、眺め愉しむ場所は、公的な場所に限らない。
- (2) 歌人、俳人、画家、写真家、旅人の眼で、身の回りの環境を「景色」として見る。
- (3) 和歌、俳句、紀行文、物語、絵画、名所絵、小説、写真、映画、テレビ、旅行案内書などに、広島の「景色」がどのように表現されてきたかを調査する。
- (4) 以上のことをワークショップ形式で、体験 伝達 共有のプロセスを踏んで、継承すべき「景色」資産をみんなのものにしていく。
- (5) 地域にふさわしい「景色」の育て方、つくり方を考える。
- (6) 向こう三軒両隣、町内、地区、・・・など、さまざまな地域で考える。
- (7) 共有し継承すべき「景色」資産を、さまざまな表現媒体で巧みに表現して、地域外にも伝えていく。情報発信主体は、民間の方が望ましい。できるだけ多くの人々が、地域にある「景色」資産を、実感し、認識・再認識する。

5 景色づくりの考え方

地域の景色がもっている多様な資源、多様な可能性を、将来に残すような景色づくりを。それは、現在の世代のためだけではなく、将来の世代のことも考えた景色づくりである。「持続可能な景色づくり」

6 日本のさまざまな景色

(1) 草木ものいふ気色



青蓮院の楠

(2) 神様の気色



巖島神社

(3) 国見の気色 / けしき



明日香

(4) 四季の景色



山口県熊毛町

(5) まちの景色

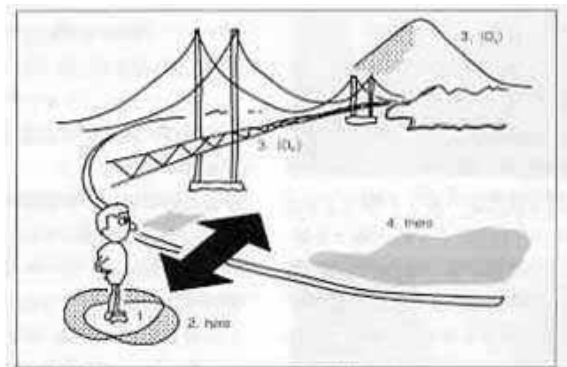


洛中の景色 = 京都の町並みと生活の景色

7 景色を育て、つくる際の二つの留意点

(1) 景色は物的対象ではない

景色は、「物の外面の様子、有様。また、外見から受ける感じ。」であった。(『日本国語大辞典』小学館) 主対象と対象場しか見ていない。



1 視点 2 視点場 3 主対象 4 対象場

『景観用語事典』

(2)「景色を眺め、楽しむ場所」が忘れられている



「けしきを眺め、楽しむ場所」=Hereの重要性を多くの人が見落している。

花見/ライデン
民俗学博物館
Viewing cherry
blossoms



景色を眺め楽しむ人たちと、その人たちがいる場所、が表現されている。



清水寺



京都/祇園新橋

このことで、私たちには、そこが居心地よい、楽しい場所に見えるのである。

景色は、眺める対象となる景色と、それを眺め楽しむ人たちと場所、この両者がセットになって表現されてきた。

(以上講演)

会場から

Q 景色の共有化誘導の有効性と効果的手法は。

A かつては和歌、そして絵画へ。小集団で景色表現の修練を繰り返すことやワークショップなど。議論や表現の洗練が必要、そうした土壌が異物の登場を排除する力となる。

Q 五感と風景の関係性は。

A 五感を分けて問うのは近代になってから。一方で、和歌の世界では五感は前提。雰囲気「気」はその意味。

Q 今後広島でつくるべきヒア(視点場)の作り方

A 庭やオープンカフェのように街の中で、ヒアを見つけ、位置づける。私的な空間の中に多い。クリストファー・アレキサンダーのパターン・ラングエッジを体験してみる。つまり「眺望と隠れ処」の隠れ処、この居心地良い所、快適な場所があり、眺望できる関係。この関係を意識して逆に造りこむこと。

Q 海辺の景観、海上からの景色

A 船上がヒア。川では川床など。楽しく豊かな場であれば。

樋口先生から、我が国における景色表現の歴史とその類型、構成要件、景色を楽しむ場の作り方などを改めて教わりました。類似の内容では学生時代にゼミで空間の現象学的解析手法としてパターン・ラングエッジを勉強して以来のことです。景色の構成要件の分析や表現方法の進化形などは、人間社会に共通する普遍性を感じました。一方で個人的感想ではありますが、類型や評価軸などは、整然と混沌の評価や風景画対象の違いなど、西洋と東洋また自然環境や文化の違いにより、差があるように思います。先生のお話を延長すると、景色を評価する行為は、その国の文学や絵画などの表現媒体によって修練され、究められてきたことになりまますから、生活様式や文化の異なる社会では景色の評価にも差があるように整理できます。また街づくりの観点からは、大きく二つのことを教わりました。ひとつは、景色の発見・維持の手法で、「体験・伝達・共有化」を繰り返すことで異物を認識できるようになり、その侵入を止めるようになることです。そしてもうひとつは、「視点場と眺望の関係性」から居心地良い視点場を創り出すことです。全国でまた世界中の都市や地域でこうしたヒントを生かしていくことが望まれます。先生には今後広島を拠点に、中国四国地方でも益々ご活躍いただきたいと願います。

(文責：広島市役所・松田智仁)



中国・四国リレーシンポジウム

公共空間とまちづくり

第2回「水と緑、歴史的資産を活かした都心づくり」

日時：平成19年6月16日(土) 13:00～16:30

場所：岡山市、岡山市立オリエント美術館

主催：日本都市計画学会中国四国支部

後援：岡山大学大学院環境学研究科、岡山大学ユネスコ
チェア、岡山市、岡山商工会議所、(社)岡山経済
同友会、(社)岡山県建築士会、NPO 法人まちづくり
推進機構岡山、NPO 法人地域再生研究センター

参加者：71名

シンポジウムの趣旨

岡山市は、平成21年4月の政令市指定を目指しており、平成19年6月に「水と緑が魅せる心豊かな田園都市」及び「中四国をつなぐ総合福祉の拠点都市」を目指すべき都市像とする新たな都市ビジョンを公表した。また、平成18年3月には「岡山の原風景を生かした景観の創生」を基本理念とする景観基本計画を策定し、平成19年1月には、市民懇談会が岡山市都心部の西川緑道公園再整備に向けた提言書を発表するなど、都市づくりをめぐる動きが活発化している。

シンポジウムでは、このような状況をふまえて、岡山市都心部における水と緑、歴史的資産を活かした公共空間の整備について議論した。

講演1「岡山市のまちづくり」

高次秀明(岡山市企画局総合政策課長)

高次氏は、岡山市の都市づくりに関連する計画として、平成19年6月に公表された新しい都市ビジョンの概要を紹介し、ビジョンの特徴として、PDCAサイクルの構築を念頭に置き、スパイラル・アップによる目標到達型の都市マネジメントを試みていること、55項目についてアウトカム指標を設定していることなどの説明があった。また、平成9年に原案を公表した都市計画マスタープラン、及び平成10年に策定された中心市街地活性化基本計画の概要説明があった。さらに、官民パートナーシップによる都心再生事業として、出石小学校跡地活用事業の紹介があった。

講演2「水と緑を活用した都心づくり」

坂本安輝子(水と緑の回遊都心をつくる会代表)

坂本氏は、岡山市都心部における水と緑の幹線軸である西川緑道公園の問題点として、東西を車道に挟まれ、周辺の街と分断されていること、整備後30年の間に樹木が生長し、開放感が損なわれていることなどを指摘した。

また、坂本氏が代表を務める「水と緑の回遊都心をつくる会」が取りまとめた西川緑道公園の再生計画『水と緑の西川モール』の内容が紹介された。

講演3「景観形成と都心づくり」

澁谷俊彦(山陽学園短期大学教授)

澁谷氏の講演では、岡山市平井地区や表町を対象とした安全・安心マップづくりや景観マップづくりの経験が



実例とともに紹介された。また、良好な景観形成に関しては、規制・誘導手段のみでは不十分であり、住民が良い景観を発掘し、育成していく仕組みが必要であるとの指摘があった。

パネルディスカッション

「水と緑、歴史的資産を活かした都心づくり」

パネリスト

上田恭嗣(ノートルダム清心女子大学教授)

古市大蔵((社)岡山経済同友会・地域振興委員長)

徳田恭子(NPO 法人まちづくり推進機構岡山・理事)

講演者3名

コーディネーター 阿部宏史(岡山大学教授)

シンポジウム後半では、岡山市のまちづくりに関わっている3名の有識者をパネリストとして迎え、3名の講演者とともに、今後の岡山市の都心づくりについて討論した。

【感想】

シンポジウムに参加していただいた講師とパネリストは、長年にわたり岡山市のまちづくりに取り組んでおり、経験に裏付けられた示唆に富む議論が展開された。以下に、まちづくりのポイントとして指摘された事項をまとめておく。

- ・広域的視点を加味しながら都市の個性を見直し、住民と行政が目指すべき都市イメージを共有する。
- ・人に優しいまちづくりの視点から、都市空間のあり方や公共空間の整備方法を見直す。
- ・住民と行政の意識改革を進め、継続的なまちづくりに向けてパートナーシップ体制を構築する。

(文責：阿部 宏史)

第3回「水辺の空間活用とまちの魅力・元気づくり」

日時：平成19年7月21日(土) 14:40～17:40

場所：徳島市、ホテルサンシャイン徳島

主催：日本都市計画学会中国四国支部

後援：国土交通省四国地方整備局、徳島県、徳島市、徳島県建築士会、徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部、徳島大学工学部、徳島大学環境防災研究センター、徳島大学地域創生センター

協力：NPO法人新町川を守る会、都市環境デザイン会議 四国ブロック

参加者：91名

中国四国5都市を巡回するリレーシンポジウム「公共空間とまちづくり」の第3回目が、7月21日、徳島市のホテルサンシャイン徳島で行われました。当日の様子をご報告します。

0. ひょうたん島クルージング

シンポジウムに先立ち、周遊船に乗って徳島市中心部の通称「ひょうたん島」を一周する見学会が行われました。これは、NPO法人新町川を守る会が毎日運行しているもので、理事長の中村英雄さんにご協力をいただき、徳島市中心部の景観を、普段は見る事ができない川から見学することができました。当日は、橋の下に芸術作品を展示する「トクシマ橋の下美術館」も開催中であり、こちらも大好評でした。



第3回のテーマは「水辺の空間活用とまちの魅力・元気づくり」です。多くの地方都市と同様、徳島市でも中心部の衰退化が深刻です。しかし、徳島市中心部には水と緑の空間が豊富に残されており、これらを活かしたまちづくりが模索されています。当日は、このテーマに関連して4名の方にご講演いただきました。

1. 魅力的なまちづくりと元気な市民活動

「新町川を守る会」のボランティア活動

(NPO法人新町川を守る会理事長 中村英雄)

中村さんからは「できる人ができる時にできることを」を合い言葉に、1990年から始まった新町川を守る会の活動について講演していただきました。新町川の清掃活動、周遊船の運航、水際コンサートなど、川からのまちづくり活動を紹介するとともに「役所に何でもお願いするのではなく、市民が提案し自ら実践すべきである」と、今後の公と民との関係に示唆を与える講演でした。



2. 水辺空間の景観整備に向けて

ひょうたん島景観まちづくり事業

(徳島県建築士会 開達也)

開さんからは、建築士会で行っているひょうたん島周辺景観まちづくり活動について講演していただきました。ひ

ょうたん島を川からみた細長い立面図の作成、それを用いた植樹や電線除去の効果がわかる景観シミュレーション、景観まちづくりワークショップの様子などを紹介していただきました。「建築のプロとして、まちづくりのプロができないことをやって行きたい。建築家の役割が今後ますます重要になってくるのが感じられました。



3. 個性あふれる景観とまちづくりの推進

景観法に基づく景観計画の推進

(国土交通省四国地方整備局 中村 孝)

2004年に施行された景観法について、他自治体における活用事例も含めながら、わかりやすく講演していただき、今後、徳島市における景観計画策定の参考になる情報を提供していただきました。



4. 都市景観評価事例

((有)田園都市設計代表取締役 大西泰弘)

都市環境デザイン会議(JUDI)が行っている、全国350都市を対象にした「美しい都市ランキング」について講演していただきました。これは「美しさ」という観点から都市の評価を行い、それをまちづくりに役立てようとする取り組みです。



中国四国支部の中でも徳島は東の端。このような僻地の開催にも関わらず、当日は建設コンサルタント、役所、建築士、学生、教員など約100名近くの方が、徳島市内はもとより県外からも多く参加していただき、有意義な会にすることができました。シンポジウムの様子は、翌日の地元紙(徳島新聞)にも紹介されました。



5. 夜パラ

シンポジウム後に懇親会が行われました。一次会終了後、この時期、徳島市内のあちこちで見かける阿波踊りの練習風景を眺めながら、新町川ボードウォークで行われている「夜パラ」(パラソルショップ)に向かいました。パラソルの下で夏の夜の心地よい風を受けながら、徳島の夜はにぎやかに更けてゆきました。



映画「眉山」には徳島の美しい風景が数多く描かれています。徳島が持つ豊富な水と緑の空間を、市民自らが認識し、様々な法制度を活用しつつ、専門家と市民がともに行動すること。このことが、まちの魅力、元気づくりにつながっていくことを感じました。

(文責 徳島大学大学院・渡辺公次郎)

第3回学術講演会(「都市計画と教育」シリーズ)

テーマ「総合的な学習の時間を活用したまちづくり教育の
実践」

共催：呉工業高等専門学校

後援：呉市教育委員会

日時：平成19年8月22日(水) 14:00~17:00

会場：呉工業高等専門学校 管理棟3階第一会議室

参加者：34名

プログラム

1. 講演 「呉市の小学校におけるまちづくり学習の取
組み」

講師 呉工業高等専門学校教授 篠部 裕

2. ワークショップ

「まちづくり学習を実践する上での諸課題」

1. 呉市の小学校におけるまちづくり学習の取り組み

篠部 裕氏(呉工業高等専門学校教授)



篠部先生には、小学校におけるまちづくり学習について、呉市内の横路小学校と阿賀小学校での取り組みを事例に、以下に示す内容の講演を頂きました。

【事例1】横路小学校における公園計画を題材としたPBL方式のまちづくり学習の実践

2004年10月~2005年1月に呉市立横路小学校(6年3組:38名)において、同小学校の校区内で計画されていた古新開第4公園(街区公園)を学習題材としてまちづくり学習が実施された。このまちづくり学習は学習題材の設定上の留意点として、児童の日常生活に関係深い公共施設であること、児童の土地勘があり、実際に見学が可能な校区内の施設であること、実際に進行している実現を前提とした公共施設計画であること、という3つの点が考慮され、古新開第4公園整備計画が題材とされた。

支援体制としては、行政(呉市公園緑地課)、教育研究機関(呉高専篠部研究室)、ボランティア団体(くれまち公園団)、NPO(くれシェンド)、地域住民が連携し、総合的な学習の時間を活用して実施された。まちづくり学習の主な実施内容は、古新開第4公園の建設予定敷地の現地見学、ワークショップ(以下、WS)での意見交換や案のまとめ、案に基づく模型作りなどを実施した。

横路小学校でのまちづくり学習の有効性と課題は以下の

とおりである。

<有効性>

実現へと繋がる学習題材の設定は、児童の意欲的な学習を促し、教育上大きな達成感や満足感を得る上で効果的である。

住民との対話が可能となり、「多様な住民の意見を聞くことの大切さ」、「まちづくりは住民相互の対話の下に進められる」ことへの理解が高まる。

「住民の意見を考慮した計画案の再検討」、「協同作業による模型作り」が特に有効である。

学習成果である図や模型をWSで活用することでスムーズなWS運営が可能となる。また、児童がこれらの作業を通してまちづくりへ主体的に関係づけることが可能となる。

<課題>

短時間(期間)でも対応できる学習プログラム

平日授業を支援できる校外支援者の確保

PBL方式となりうる学習題材の選定

都市計画行政との連携、WSの運営者や行政側が学習題材を提供

WS参加者の主体性に配慮した学習プログラムの検討

なお、古新開第4公園は児童の計画提案に基づき、2007年3月に完成した。

【事例2】阿賀小学校におけるまちづくり学習の実践

2007年4月から呉市立阿賀小学校6年生28名を対象に、総合的な学習の時間を活用して実施されている。このまちづくり学習は現在も継続中であり、学習成果のまとめの段階まで進み、あとは成果発表会を残している段階である。

学習対象は、神田神社(阿賀のまち全体)、阿賀小学校・延崎小学校、JR安芸阿賀駅、休山トンネル、東広島・呉自動車道、阿賀マリノポリス地区の6テーマ(6グループ)であり、それぞれのテーマで「過去」、「現在」、「未来」について調査し、「未来」への提言を目指すものである。外部支援者としては、呉高専篠部研究室、呉高専山岡研究部の学生、呉市職員などである。

学習プログラムの流れは、学習対象の設定、家族および住民インタビュー(新聞記者になりきる)、現地調査、学習成果のまとめ(「阿賀のまち新聞」の作成、ミニ発表会、となっている。

阿賀小学校でのまちづくり学習の評価は、まだ途中段階であるため、これから分析するところであるが、まちづくり学習に取り組んだ児童やまちづくり学習を支援した呉高専の学生の様々な教育効果が期待できると思われる。

2. まちづくり学習を実践する上での諸課題

小学校や中学校でまちづくり学習を実践する上での課題を、参加者が2つの班に分かれ、ワークショップ形式で議論し、意見をまとめて各班のファシリテーターが報告した。なお、参加者は支援する側である大学・高専教員、行政関係者、NPO関係者、大学生・高専専攻科生・高専本科生

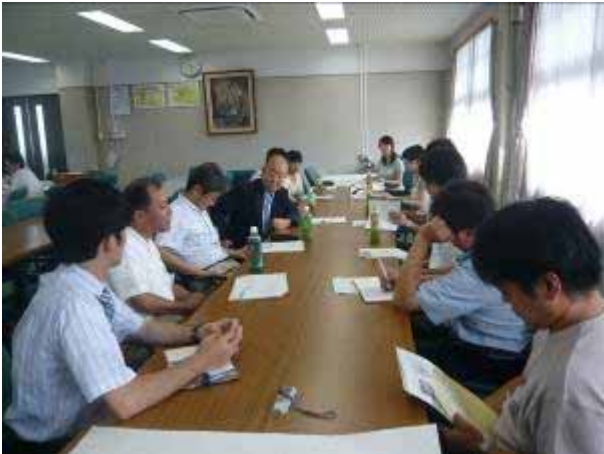
が中心であったが、2班に1名の小学校教諭にご参加いただいた。

1班 ファシリテーター：篠部裕氏（呉工業高等専門学校教授）

班員：13名

議論された課題の要点

- 1) まちづくり学習の支援者の確保（平日，謝金面での問題）
- 2) まちづくり学習の支援者のコーディネート（学校のニーズと支援者のマッチング）
- 3) まちづくり学習のテーマと達成目標の設定
- 4) まちづくり学習の成果の公開とノウハウの共有



2班 ファシリテーター：山岡俊一（呉工業高等専門学校助教）

班員：13名

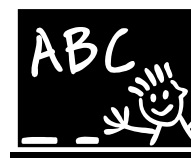
議論された課題の要点

- 1) 小学校・中学校と支援する側（大学・高専や行政等）がお互いの事情を知らない。意見交換の場が少ない。
- 2) 小学校・中学校と支援する側の意見・考えの合致が難しい場合もある。
- 3) 時間調整が難しい。
- 4) 小学校・中学校側としては、前年度の2学期頃には話を持ってきてもらったほうが連携しやすい。
- 5) 小学校・中学校が支援してもらいたくてもどこに相談すればよいか分からないことが多い。

おわりに

「都市計画と教育」シリーズの第3回目は、小学校や中学校におけるまちづくり教育について学び、議論した。学習目標の設定、日程調整等の手続きを含めて様々な課題が抽出された。とりわけ、小学校や中学校がまちづくりを題材とした教育を積極的に実施できるために、まず日本都市計画学会としてできることは、支援する側である大学・高専、行政機関、企業、NPO 等との橋渡し役を担っていくことであることを再認識した。教育現場と学会とのワンストップ窓口の設置に向けて検討できればと思われる。

（文責：山岡 俊一）



第1回都市計画研究会

テーマ：広島市京橋川の水辺と取組み等

日時：平成19年8月18日(土)15:00～17:00

場所：RCC文化センター

参加者：33名

講演者：国本 善平(広島市都市活性化局観光交流部長)

新上 敏彦(広島市都市活性化局観光交流部水の都担当課長)

津久井 雅也(「カフェリガロZEN」経営者)

「公共空間活用の歩みと可能性・課題」を今年度のテーマとして、第1回目の都市計画研究会は国本氏曰く座談会形式で、公共空間の活用による京橋川のオープンカフェのオープンに至る経緯の説明で始まった。

広島市の公共空間活用プロジェクトは戦後まもなくスタートしたが、実際に広島市主導で実行されたのは、1998年の平和大通りのオープンカフェが最初である。(道路の活用)

きっかけはつまらない公共空間をなんとかしたいということであったが、道路法などにより警察署の許可がなかなか得られないなかにも社会実験という形で、1998年から2000年までの3年間実施された。

初年度は実行委員会直営ということで国本氏自らも接客を行った結果、天候にも恵まれ、予算も余った。

しかし、翌年以降は民活を導入したにもかかわらず、雨や台風などの天候に恵まれず2年続けて赤字となってしまった。

1999年には元安川パラソルギャラリー(河川の活用)が2000年にはアリスガーデンにぎわいづくり、スペース新天地(公共広場の活用)と公共空間の活用が図られていった。

また、京橋川ではオープンカフェ開設に先行して川沿いのホテルにおいて、前面の河岸緑地をホテル負担で、舗装や植栽、24時間利用可能なトイレの整備等を行った。

そして、2005年にはオープンカフェの開設となった。

引き続き新上氏より、国本氏の説明を補足する形で説明が行われた。

ここでは、計画背景・経緯、計画を推進していくための体制、戦略、手法等がパワーポイントを通して図や写真を示して説明がされた。



国本氏



新上氏



会場の様子

具体的には新しい仕組みづくりということで、制度面では河川管理者、公園管理者、出店者が協議を行い、自治会をはじめ地元関係者たちが協議し、取り決めを行った点や経費面では基盤整備を広島市が行い、店舗の設計・施工費を出店者が負担し、公共の負担軽減を行った点について述べられた。

また、開業1年で店舗利用者約7万5千人にも昇り、予想目標の約2倍に達したことも見逃せない。

そして、新たな賑わいのスポットとして定着した点やまちづくり活動の誘発といったオープンカフェの開業による効果、今後、別の水辺においても新たな展開を模索している点などについても述べられた。

次に京橋川オープンカフェに出店している津久井氏より、店の状況について説明がされた。

オープン初年度の来客数は月当たり3,000人であったのが2年目は800人程度減少したものの、フリー客が減り、予約客が増加したこともあり、客単価一人当たり平均150円程度増加した。

また、予約客の客単価はフリー客も含めた平均客単価の約2倍だそうである。

店の構造上、大人数の予約が取れない、店全部オープンにしたい、店舗は8店舗ぐらいあったらいいなど津久井氏自身が感じた問題点や要望が語られた。また、音大生を招いて演奏会を開催するといった集客努力している点についても述べられた。

質疑応答では「経営は黒字なのか」、「経営リスクはないのか」といった経営について集中し、「来年は何万円の黒字が見込める」と具体的な金額が示され、「経営にリスクは必要」といった津久井氏の経営者としてのたくましさを感じさせる回答も得られた。

その後、整備されたホテル前の河岸緑地の視察と津久井氏経営のオープンカフェで意見交換会を行い、大盛況であった。

なお、最後にはるばる徳島から来ていただき、この会を盛り上げていただいた徳島県建築士会7名の方々に感謝したい。(文責：隅田 誠)



津久井氏



京橋川オープンカフェでの意見交換会のひとコマ



移動広告車の表示気温は33！暑い夜でした。

第2回都市計画研究会

テーマ：呉市 蔵本通り（屋台）及び周辺の取り組み

日時：平成19年9月15日(土)16:00～18:00

場所：呉大学呉駅キャンパス 会議室

参加者：25名

プログラム：

講演 公共空間の賑わい利用とまちづくり

中川 博文氏（呉市都市計画課長）

現地視察 赤ちょうちん通り（屋台街ほか）

第1回の広島市における「京橋川の水辺の取組み等」に引き続き、今回は、呉市が主導的に取り組んだ蔵本通りの屋台再生を中心に、呉市における公共空間の活用と賑わいまちづくり事例について研究会が開催された。

講演内容

【公共空間の賑わい利用とまちづくり 中川 博文氏】

1. 呉市の概要と課題

かつて戦争中は、人口40万人を有したが、戦後15万人まで激減し、平成の合併で25万人となったが、なお減少傾向は続いている。



呉市における都市計画上の課題は、現在の4つの都市計画区域の再編であり、とりわけ、市街化調整区域のあり方が最大の焦点となっている。

2. 呉市における公共空間の利用実績

呉市における公共空間利用の代表的な地区は、中央地区約1.5km²であり、主な、利用実績としては、以下のようなものがある。

道路空間利用 - 蔵本通り、中通りにおける「みなとまつり」、「水産まつり」、「食の祭典」などの各種イベントやオープンカフェ、市民バンドによるコンサートの開催

公園空間利用 - 蔵本通りにおける屋台の常設

その他公園・河川空間におけるイベント開催

3. 中通りの事例

昭和53年にオープンした中通買物公園「れんがどおり」における延長610m、幅員18mの歩行者専用道路では、現在も土曜夜市などのイベント利用が続いており、そのきっかけとなったのが、昭和49年の買物実験公園の実施である。道路占用許可の問題については、警察当局との協議を繰り返し行い、昔ながらの既得権として認めてもらうことは出来たが、新規の占用についてはハードルが高く、屋台文化衰退の要因にもなっているのが、実情である。

4. 蔵本通りの事例

蔵本通りにおける屋台の常設利用の背景には、昭和50年代になって市民からの要請を受けて実施した都市景観形成モデル事業がある。そのモデル地区のメインストリートとなる市役所から呉中央棧橋方面に向けて、堺川と平行して走る車道6車線、全幅40mの都市計画街路「蔵本通り」。その一部を都市公園区域に取り込み、車道の4車線化と公園、河川事業との複合的事業として進め、設備ユニット内

蔵ベンチの設置など屋台利用に配慮した整備を行った。

ここで毎年開催される「みなとまつり」も、50回の歴史を重ね、15万人の人出でにぎわっているが、露店と常設屋台とのトラブルも多い。

昭和40年代には、28軒の屋台がまちの各所に点在していたが、蔵本通りの整備に合わせて1地区に集約することとなった。現在は、新規募集によるイタリアンやアジア料理、創作料理など新ジャンルの8店舗を含め12軒がオープンし、3軒が空き状態となっている。

5. 公共空間利用の意義と課題そして今後の取組み方針

公共空間利用の意義には、利用者と行政のそれぞれの立場での思惑があるが、共通意識による利用促進施策の展開が本来のねらいとして存在している。その反面、両者の対立関係を作っているのが、利益優先の考え方と公平・公共性の考え方に基づくものである。

今後、解決すべき課題として「公共空間利用の公平性」、「利用者ニーズの把握」、「基盤整備の機能付加」、「利用者費用負担の考え方の整理」等があり、以下のような方針で取り組んでいきたい。

回遊性の創造 - 中通から宝町へ、イベントを活用した人の流れを生むことへの貢献・支援策

波及効果の創造 - 観光客の誘致等、まちおこしの起爆剤になる取り組み

今後の利用策 - 倉橋、安芸灘商品のブランド化、朝市の開催、その他蔵本通り、中通り等の商業の活性化に結びつく市民主体のイベント企画の支援など

これからは、行政主導から脱却し、市民主体の取り組みを行政が後方から支援していくことが大切である。

公共空間の利用には様々な課題もあるが、波及効果も大きいことは事実である。今回の研究会が公共空間を利用したまちづくりの参考となり、様々な課題の解決への一助になれば幸いである。

質疑応答の中では、都市計画道路と都市公園区域のダブル決定に至った経緯、行政と屋台組合の役割分担、行政の関わり方、屋台出店の募集と選定基準、屋台の経営実態、使用料金の設定の考え方、屋台文化のさらなる研究、利用実態調査結果など活発な質疑や意見が数多くあった。

現地視察 / 赤ちょうちん通り / それぞれ特徴的な屋台が公園区域内に並んでいる / 若者も多く客層も様々



今回の全国でも珍しい道路兼公園空間の利用事例を通して、公共空間利用の波及効果の大きさを再認識するとともに、様々な都市の事例についての総括的な検証の必要性が強く感じられた。

(文責：長谷山 弘志)

第3回都市計画研究会(特別講演会)

テーマ：中心市街地活性化の第二ステージを探る

・全国の注目事例と広島都市圏内拠点都市の課題・

日時：平成19年9月20日(木)18:30~20:30

場所：広島工業大学広島校舎

主催：広島県建築士会広島支部，日本建築学会中国支部，
日本都市計画学会中国四国支部

参加者：51名

講師：藻谷 浩介氏(日本政策投資銀行 参事役)

藻谷氏は、内閣府 財務省、国土交通省など数多くの政府関係委員を務められ、マスコミ等でもご活躍である。本研究会では、同氏をお迎えし、中心市街地活性化のあり方について講演をいただいた。



中心市街地活性化の第一ステージ

都市の財政が豊かであれば、中心市街地に活気が漲るわけではない。自動車産業で栄える愛知県の都市には、財政力がありながら駅前が衰退する事例がある。中心市街地の根幹的な問題は決して財政ではなく土地利用の問題であり、地権者の協力を得ることができてはじめて中心市街地活性化の第一ステージが始まる。

同氏は中心市街地の活性化の第一ステージを「地権者の協力による既存遊休資産の活用」と定義して、空き家や空き店舗を利用した活性化を目指す必要があると提唱する。九州地方のある地方都市ではアーケード内に大規模な賑わい公共空間をつくったが、周辺施設をプロデュースする人がいなかったため機能していない。一方でアーケードでないところに空き家を活用したアパレルなど面白いまちができており、ハード整備が無くてもまちのプロデュース一つでその運命は大きく分かれている。

滋賀県長浜市黒壁スクエアは第一ステージの好事例といえよう。取り組みを始めてから約200件の店舗が内装を替えるなどリニューアルして、今では年間200万人、一日6,000人が訪れるようになった。空き店舗に新しい人たちが来て店をはじめるとまちが繋がり活気が生まれた。駐車場は地区内には無く、訪れる人は周辺の駐車場から歩いて回遊しながらまちを楽しんでいる。また面白いことにこの地区内で特に人の多い通りは、新しい店舗と以前からのこだわりのある老舗が混在する通りである。新しい息吹と昔ながらの伝統が一つになって行き交う人の魅力を引き付けているのであろう。

中心市街地活性化の第一ステージでは、地権者の理解を得ることで空いている資産を有効活用することが重要である。決して立派なハコモノや駐車場を用意するのではなく、少ない投資の中で遊休資産を活かすことから始めるべきである。

中心市街地活性化の第二ステージ

第二ステージは「地権者の協力による建物の建て替えとテナント入れ替え、そしてその横方向への連鎖」である。建築物は高層化して集約するのではなく、中低層で横に連鎖していくことが必要である。

高松市丸亀町商店街再開発A街区は第二ステージの数少ない好事例といえよう。ここでは定期借地方式再開発により事業化し建築物を中低層化することで、借入リスクを抑えて79人という多くの権利者の同意を可能にした。再開発整備が進むにつれて人通りは増えており、また同様な低中層建築物が横に繋がりはじめている。こうした成功の背景にはテナントマネジメントできるプロが必要で、ここでも地元商店街のキーパーソンが活躍した。ところがこの商店街にも高層化を検討している街区がある。建築物の高層化は近年の建材の高騰とも相まって事業化リスクが高くなるが、「高層信仰」ともいえる地権者の高層化への「想い」が第二ステージの進展を阻んでいるように思える。

過剰な商業床への警告

中心市街地活性化が進展しない間に、一方では過剰な商業床の問題が全国で急速に進展している。

わが国全体の小売売場面積は、バブル崩壊後も一貫して右肩上がりの増加を続けている。このような売場面積の増加が経済の成長に伴うものであれば良いのだが、統計数字上みると、明らかに売上増の伴わない過剰投資の結果といえよう。広島都市圏の場合でも、1993年-1994年で小売販売額はピークとなり、その後は低落の一途を辿っている。売場面積が1990年度末から2003年度末の間に27万3千㎡も増加する中で、小売販売額は1,987億円となり、従業者数は6,300人と低下している。この小売販売額減少の背景には、現役世代の減少により就業者数が減少し、その結果、個人所得減少というメカニズムがある。広島都市圏でも同期間に3,112億円もの個人所得が減少しており、高齢化が進み団塊の世代が退職を迎えることで、今後さらにこの傾向は進展することは明らかである。

おわりに

藻谷氏の講演、委員会、TV出演などは年間400回を超えるという。過密なスケジュールの中にも係わらず、エネルギーな講演は、まちづくりの原点へのメッセージかもしれない。平成合併前3,200市町村の99.9%を巡歴したという同氏のプロフィールにその源を感じさせられた。同氏の著書「実測！ニッポンの地域力（日本経済新聞社）」がこの9月に発刊された。ぜひ一読していただきたい。



(文責：周藤 浩司)

平成19年度第2回幹事会・

支部連携行事第3回実行委員会

日時：平成19(2007)年7月28日(土)13:00~14:45

場所：コンフォートホテル広島2階会議室C

<議題>

1. 各委員会の活動計画の具体化(都市計画研究会、都市計画サロン、学術講演会等)
2. 支部連携行事の事業報告・開催計画
3. 支部連携行事に関わる本部からの新たな費用配分(50万円)について
4. 支部への調査研究事業委託について
5. その他(研究交流組織の公募等)

<議事>

1. 各委員会の活動計画の具体化

(1) 学術委員会

第3回学術講演会

- ・8/22、14:00~17:00、呉工業高等専門学校にて開催予定

(2) 企画研究委員会

都市計画研究会

- ・リレーシンポジウムとの協調テーマとして、以下の通り開催予定。

8/18 事例研究-1 広島市京橋川の取り組み 15:00~17:00 場所:RCC文化センター会議室C3

9/15 事例研究-2 呉市蔵本通りの取り組み 15:00~17:00 場所:呉大学駅前キャンパス

9/20 特別講演会(他団体と共催予定) 藻谷浩介氏(日本政策投資銀行地域振興部)広島工業大学広島校舎301 18:30~20:30

11/10 総括討論会 リレーシンポジウムを含む総括討論会を企画中

都市計画サロン

- ・運営方針(案)について説明委員の変更
- ・退任1名、新任5名、総数32名
補充は適宜可能であり名簿の通り承認。ただし、限られた人材であり、今後は調整委員会において各委員会への配属を調整することとする。
「みんなでまちづくりハンドブック(仮称)」
- ・広島市作成で、学会員が編集協力予定。編集協力者として学会員の名称を出す。
- ・ある程度まとまった段階で、ハンドブックの概要を支部長等に報告する。そのとき、学会名を出すかについては判断する。
成果物を学会に報告することを条件とする。

(3) 総務委員会

地域で活動しているNPO団体を学会誌に載せる件で、本部に「セトラ」「がんぎ組」を推薦した。

2. 支部連携行事の事業報告・開催計画

(1) 事業報告

- ・岡山(6/16):参加者71名、総事業費113千円
- ・徳島(7/21):参加者91名、総事業費108千円

(2) 開催計画

- ・高知(10/6)
懇親会を開催すること。広島からの参加者に発言の機会を作って欲しい。
- ・広島(11/10)
- ・街づくり悩みごと相談コーナー(11/10)(市民にアピールするため「悩みごと」を付した)

3. 支部連携行事に関わる本部からの新たな費用配分(50万円)について・(案)

リレーシンポジウムの継承・発展

- ・開催を予定していない4県での開催を検討。
- ・予算的に3都市が限度なら、鳥取・島根を1つとみなして2ないし3県(山口、愛媛(香川))とする。(第4回学術講演会「都市計画と教育」を高松で開催することも考慮する)
- ・候補としては、山口県、愛媛県をあげ、該当する地域の幹事等と協議・調整する。
街づくり相談コーナーの開設
- ・11/10の成果を踏まえて拡張
中海再生プロジェクトのレポート作成
これは、本部予算(500万円:5その他参照)への公募の方が適切。
都市計画と教育との協調テーマも考えられる
企画研究委員会で検討する。
現時点では予算の執行時期等は未定。日程が明らかになれば支部長が本部に申請する。

4. 支部への調査研究事業委託について

- ・受託業務であり、本部理事会での承認事項となる。支部としては幹事会の承認事項とする。
- ・これまで、企画研究委員会の中で準備会を3回実施したが、まだ結論が出ていない。8/10に第4回を開催予定である。
- ・今後は、「委託研究準備会」を設立し、ここに一任する。準備会の構成メンバーは支部長に一任する。
コンサルタント、大学が連携して、責任を持って実施できる体制をつくってから取り組むこととする。

5. その他

- ・学会本部で500万円の予算を確保し、「研究交流組織」を公募する予定。
- ・支部は関与しないので、直接本部に申請となる。

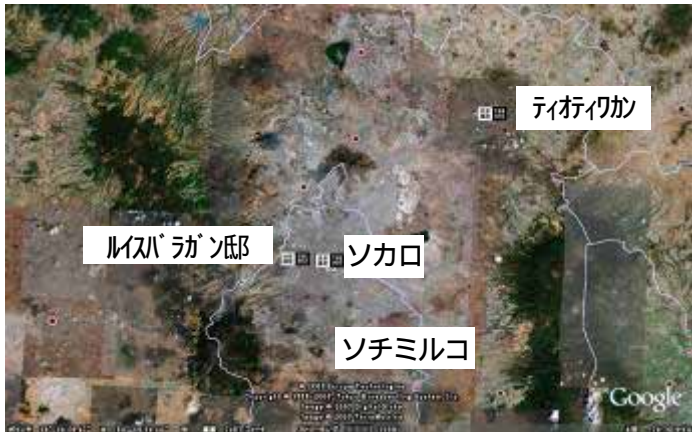
(文責:佐伯 達郎)

メキシコに行ってきた。

メキシコは、巨大なアステカ文明やマヤ文明の栄えた地域である。以前ペルーでインカ帝国の遺跡を見てから、双璧ともいえるアステカ文明に興味を以前より持っていたところ、この度行く機会を得た。



メキシコ。元はアステカやマヤの版図だったが、アメリカにだまされて？テキサスやニューメキシコなどを安く買われている。



メキシコシティ。市街地で埋め尽くされ、湖の面影はない。また、世界遺産だらけ。

メキシコ概要

メキシコに行くには、成田からの直行便もメヒカーナ航空やアエロメヒコ航空（注：ニューメキシコに行く途中メキシコ内でトランジットがある）などあるが、数の多さではアメリカ合衆国に一度飛び、トランジットしてメキシコに飛び便が多いようだ。

気温は、メキシコシティでは標高が2240mであるため、行った7月でも最高気温 23 度最低気温 11.5 度という、よく日本でメキシコのイメージとされる砂漠にサボテンに熱い太陽といったものとは程遠い。多分、それは北部のアメリカとの国境近くのイメージなのだろう。

物価は都市部ではあまり日本と大差ないようだが、メキシコシティでは地下鉄が張り巡らされており、一回乗ると2ペソ（20円程度）で空港から郊外までだいたいどこにでも行けるといった風に、公共料金は割安だ。物売りが電車やバス

などにしょっちゅう出入りするが、だいたい10ペソ（100円）でCDなどを販売しているので、気楽な金額はそれぐらいのようである。

交通

交通としてはパリのメトロを導入したまさにメトロがかなりの頻度で運航しているほか、専用レーンや立派な屋根付きホームを備えたBRTが運航しているなど、便利さや誰でもすぐに乗れる気軽さ、先進性は、メガロシティで比較しても東京を超えているかもしれない。ちなみに、メキシコシティは、都市圏でいえば2000万人級のメガロシティだ。空港も都市の真ん中にあるほか、現在改装中で、国の顔としての体裁が揃ってきているところのようだ。



パリから輸入したメトロ



改装空港増築中。



BRTとバス専用レーンとバス用駅舎



円形広場に面したバス用駅舎。

街の歴史

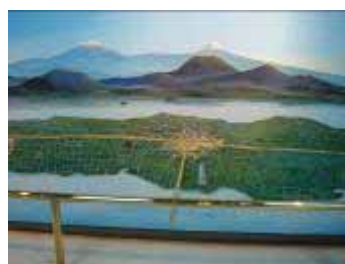
アステカ帝国

メキシコシティは、元はアステカ帝国の首都で、テスココという湖に浮かぶテノチティランと呼ばれる都市だった。神殿や宮殿の部分が島にあり、その間は水路が縦横無尽に流れ、その小さな島の外には浮畑や農民の家が繋がれて広がっているような、現在では見ることのできない不思議な都市だったようだ。

この湖に浮かぶ不思議な都市は、スペインがエルナンコルテスをして占領した後遺跡は壊し、湖を埋めることにより、完膚なきまでに西洋都市にされてしまった。

浮畑農業の名残が今見ることのできる場所は、メキシコシティの南にあるソチミルコという町ぐらいである。

また、破壊し埋められた遺跡は、最近上に建てられていた教会を撤去し、発掘されることにより、テンプロ・マイヨールという名称で世界遺産として公開されている。



湖に浮かぶアステカの首都



神殿やピラミッドが立並ぶ様子



1628年の様子。まだ湖がある。

1856年の様子。湖はない。



ソカロと呼ばれるメキシコの中心の広場。元々アステカの宮殿やピラミッドが並ぶ場所だった。現在の舞踊や祈禱をする人が名残だ。

テンプロマイヨール

テンプロマイヨールは、アステカ帝国の都テノチティランの中央神殿のひとつで、水上都市の宿命か、地盤沈下しては皇帝の代が変わる度に増築をしていくことにより、巨大化したピラミッドのようだ。スペイン人が征服し破壊したが、丁度上の部分をちょん切った形になったので、増築を続けた入れ子になったピラミッドの構造が奇しくも見えることとなった。最初に作られた神殿が一番小さくなるので、たまたまピラミッドの頂上に神殿の柱が立っているところまで壊されずに残っている。色もいくらか残っており、白と黒のボーダーの柱や、赤と緑の壁など、遺跡がモダンな感じであったことが感じられる。アステカ文明の特色である生贄の風習は、心臓を捧げ持つチャックモールの像がピラミッドの上でよく見える神殿の外に設置してあることでよく分かる。

生贄は、アステカカレンダーと呼ばれる太陰暦のカレンダーにより、1年を通して捧げられた。生贄を入手するための戦争も行われていたようだ広場の真ん中には、生贄にした後の生首を繋いで吊るしておくための施設もあったようで、中央神殿のひとつは、骸骨を四面にびっちり彫刻がされていたようだ。

アステカ人は、幸せが得られるには、それなりの代償が必要だと考えていたようで、より価値のあるものを捧げるということで、人間を捧げていたようである。

アステカ人の信じていた神は、アステカの時代からだけではなく、その前の文明で信じられていた神も含めた多神教だった。アステカ人が神代の遺跡だと考え敬ったティオティワカンについて書く。



初期の神殿とチャックモールの像。



アステカカレンダー。

ティオティワカン

アステカ帝国であるメキシコシティから50Km先、地下鉄で郊外まで出、そこからバスで1時間の場所にある。

アステカの時代にはもう既に遺跡しかなかったため、アステカ人は神代の遺跡としてティオティワカン遺跡を敬った。

しかし、どのような人が住んでいたのかも含め、まだまだ研究が進められている都市遺跡である。

ティオティワカンの歴史は、だいたい紀元前から10世紀まで続いた都市のようだ。一番栄えた時代は、350年~650年らしい。人口は20万人以上を擁していたと考えられる。この時代では、ヨーロッパでもコンスタンチノーブルが2万人を超えるぐらいであったため、全世界でも破格の規模の都市であったことが考えられる。

紀元前頃におきた火山の噴火など気候変動により、生活しやすいこの地域に人が集まり、祭事を行う神官を中心に、平和的な神制政治がおこなわれていた。政治を行う神官を頂点に、軍人、商人、職人などに階層分けがされ、それぞれの職種別に各々のパリオ(地区)に暮らしていた。



遺跡として公開されているのは、2km四方程度の区域だ。

都市の構造として、中心に一直線に伸びる広場の連続があり、そのアイストップとしてランドマークになる月のピラミッドが聳え立つという空間的にも神聖さを与え畏怖を覚えさせるなかなか分かりやすかつ壮大な都市構造だ。

中心に一直線に延びる広場の連続の両側に、市街地が広がる。集住をするために必要な広場や上下水、それぞれの職業に必要な施設などの遺跡が残っており、人が生活していた面影を見ることができる。

ピラミッドや神殿、住居などの構造物については、神官が作ることを指揮したと考えられる。人が何個か抱えて運べるような小さな火山岩を石灰で固めて作ってあるようだ。

アイストップの位置には、正確な形をした月のピラミッドが立っている。それとは別に、さらに巨大な太陽のピラミッド

ドが、都市の真ん中辺に立っている。

太陽のピラミッドは、高さが65mの巨大なもので、元々小山があり、中に洞窟があったらしい。その洞窟信仰からピラミッドへと進化させていったようだ。



山の前に月のピラミッドが立ち、真直ぐ道があり、周りに町がある。



月のピラミッド、太陽のピラミッド。巨大なピラミッドが立つ。

ソチミルコ

メキシコシティの南にアステカ帝国の湖の名残の水路が残るところがある。ソチミルコだ。

現在も浮き畑農業がされており、週末にはメキシコの人々が家族や友人と船を借り、飲食をしながら過ごす。

マリアッチ(楽団)や花売り、飲食物売りなどが船で近づいてくる。優雅でお祭のような楽しい空間がそこにある。



色々なカラフルな船が出、色々な店やら楽団が近づいてくる。

グアナファト

グアナファトは、メキシコシティからバスで北西に5時間。

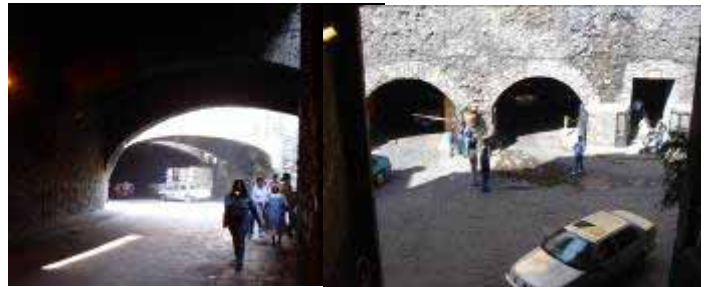
銀を産出していた町といえば、大森銀山が最近世界遺産になったが、グアナファトは1548年に銀が発見されてから、18世紀には銀の産出量が世界の3分の1となった町で、世界遺産として町全体が維持管理されている、メキシコで一番美しい町とされるコロニアル都市である。

この美しい町ができるには、まず、膨大な人数の原住民を使った非人道的な銀の採掘で得られた富があるということをお忘れてはいけない。狭い坑道で、子供の労働が多かったそうだ。その強制労働の酷さから、メキシコ独立の指導者ミゲル・イダルゴ神父が独立運動の口火を切ったといういきさつがある。

そのような歴史があったにもかかわらず、現在残る町は、南米らしい鮮やかなコロニアル建築が居並ぶ美しい町だ。

町に入るには、まず、坑道や下水道を生かした町の地下を縦横無尽に走る道路をバスで走り、地下でバスを降りるところから始まる。かなり面食らう。そこから階段で地上に上がると、いきなりコロニアル都市の公園に立っているという状況になる。

それぞれの広場には露店が多い。まちには、生活に必要な町が並んでいる。勿論、タコス屋もある。



地下道。逆に地上に町、地下に車でポストンで最近行なった工事が昔からあるものでやっているという新しさが面白い。



あちらこちらに地下と地上を繋ぐ階段がある。地上に上がるとそこは広場だ。オープンカフェあり露店あり。くつろぐ人あり。



広場の要素。緑、舞台、流しの楽団による音楽、休養するベンチ、散歩する遊歩道、オープンカフェ、バー、露店。全て揃っている。広場のあちらこちらで、それぞれの人生が展開している。常時音楽や笑い声が絶えない。

ルイス・バラガン邸

建築屋の誰もが知るルイス・バラガン。世界文化遺産になっているその自邸を訪ねた。

まず、本当に普通の住宅地に、パッと見ほかの家とも繋がっているため、どこにあるか、ぜんぜん分からない。地元の人に何人が伺い、やっとたどり着く。

予約が必要なのだが、ねじ込んで入る。

結構それぞれの部屋は思ったより狭いが、空間を広く感じさせる構成がすごい。また、それぞれの部屋がそれぞれ違っている。色はやはりメキシコらしくくっきりはっきりした色だが、ソリッド感があり、安っぽさはない。いたるところに実直なキリスト者らしい十字や天国に上る階段風のモチーフが認められる。バラガンが40年も過ごしただけあり、少しずつ改良を加えて、マイベストを作り上げた風が感じられる。

道は、丁度バスが一台通れるだけの幅がある。そして、左右に90cmばかりの歩道がある。バスが通るときには、まさに一杯一杯といった感じである。

広場にはカフェが立ち並び、夜にはマリアッチ(楽団)が音楽を奏でる。

勿論、銀山の町であるので、坑道も公開されている。現地の人々がスペイン語で案内してくれる。出てから、その地区の教会の祭壇が金メッキされているのを見る。光と影の対比。



暗い坑道。少年少女が苦役を強いられた。その鉱物である金で飾られた教会の祭壇。坑道のすぐそばにあるのだが、原因と結果といった感じだ。



鉱山で栄えた町。現在は、大学と観光が主だ。銀は現在も産出しているらしく、IT関係で銀を使うため、日本が重要な輸出先だそうだ。



オモチャをひっくりかえしたように彩り豊かな家が立ち並び、夜にはその家の間の細街路をマリアッチが流して歩く。



バラガン協会が維持管理をしており、部屋の中はひとつも写真を取らせてもらえなかった。有名な屋上と外観のみ、許可してもらい、写真を撮った。

感想

メキシコというと貧しい都市だと考えていたのだが、インフレの時代からは遠くなり、現在ではどちらかというとアメリカとの国境近くのイメージのようだ。大人から子供まで、働くのが当たり前という風であり、悲壮感はない。たまに子供や身障者の乞食がいるが、逆に言えば、働けるものはみな働いている風だ。砂漠も見なかった。これもメキシコの北方のイメージのようだ。緑がどこまでも続いていた。

この国に、皆さんもぜひ行って下さい!



会員紹介

福田由美子(ふくだゆみこ)

広島工業大学工学部建築工学科准教授

故郷

佐賀県唐津市出身。唐津は、人口7万5千人(小学校で学んだ数字、合併で現在は13万4千人)の、海の幸と祭りが自慢の城下町です。他都市同様、多くの人が行き交っていた中心街も今では寂しい姿になっています。しかしながら、今も唐津に住まう人々が、まちを元気するための様々な取組を始めているというニュースを、帰郷の折に聞くたびにうれしく思います。幼少期を過ごしたこのまちは、私にとっては特別なまちです。

住むことへの関心

熊本大学で建築を学び、延藤安弘先生との出会いにより、人が住む、生活するというを深く考えるようになりました。生活の器である住宅が、長い年月生き生きとした状態で住まわれるためには何が必要か。その一つの解答として研究室では、建物を造る過程への住み手の参加を位置づけ、コーポラティブ住宅や公営住宅などを対象に、調査分析を行ってまいりました。住民の方々の、バイタリティあふれる暮らしぶりに圧倒されつつも、その面白さに引き込まれていった時期です。同時に、住民との対話は様々な意味での人生勉強の機会となりました。

まちづくりへの展開

1996年に広島に来てすぐに、住民参加のまちづくりとして行政と建築士会のメンバーが取り組んだ「可部のまちづくり」事業に関わる機会を得ました。この中で在広の建築士、プランナー、行政市民の面々と交わることができ、人のつながりを縁として、広島ではいくつかのまちづくり活動に関わるようになりました。地域の様々な活動には、研究室の学生とともに出向くことが多く、私が学生時代そうであったように、地域住民に皆さんに学生たちが育てられていると実感することが数多くあります。

まちの記憶

5年ほど前に、原爆で失われたまちを住民の記憶を頼りにCGで復元する事業に関わりました。その作業を通して、住民たちが鮮明にまちの記憶を持ち続けていることに大変驚きました。と同時に、人のアイデンティティを形成するまちの記憶を持つことの重要性和、記憶が紡がれるようなまちをつくることの大事さを痛感しました。

そこで生活する人、また生活したことがある人皆が、大切に思ってくれるようなまちを目指したいと思いながら、学生とともに活動しています。



<佐伯区八幡川でのイカダづくり...体力勝負です>

今後の活動計画

支部連携行事 - 中国・四国リレーシンポジウム“公共空間とまちづくり” -

高知市(第4回)

日時 2007年10月6日(土)13:30-16:30

場所 高知共済会館2階会議室

高知市本町5-3-20 (tel:088-823-3211)

テーマ:土佐の日曜市とまちの魅力・元気

担当責任者:大谷英人氏(高知工科大学教授)

広島市(第5回)

都市計画研究会総括討論会を兼ねて実施

日時 2007年11月10日(土)13:30-17:00

場所 ホテル法華クラブ広島10階(リンデンバウム)

広島市中区中町7-7 (tel:082-248-3371)

17:00より、平和大通り全日空ホテル前にて交流会開催

テーマ:中国・四国の現場に学ぶ公共空間とまちづくり

担当責任者:松波龍一氏(松波計画事務所)

街づくり悩みごと相談コーナー

日時 2007年11月10日(土)10:00~12:30

場所 ホテル法華クラブ広島2階(安芸の間)

広島市中区中町7-7 (tel:082-248-3371)

担当責任者:松田智仁氏(広島市)

都市計画サロン - 吉川富夫氏 -

日時 2007年10月13日(土)16:30-17:30

場所 広島市市民まちづくり交流プラザ

5階 研修室B

広島市中区袋町6番36号 TEL082(545)8911

テーマ:新しい公共の時代のまちづくり

建築文化週間2007

日時 2007年10月20日(土)~21日(日)

場所 四万十町(旧大正町),四万十川流域

テーマ 四万十川流域の文化的景観と近代化遺産

主催 (社)日本建築学会四国支部・高知支所

共催 (社)日本建築家協会四国支部,都市環境デザイン

会議,(社)高知県建築設計監理協会,高知県建設系教育協議会,NPO法人高知まちづくり支援ネットワーク(予定)

後援 (社)日本都市計画学会中国四国支部,高知県教育委員会,四万十町教育委員会,高知県建築士会,NPO法人高知市民会議,高知新聞社,NHK高知放送局,高知放送,テレビ高知,高知さんさんテレビ
その他

参加費 無料

スケジュール

- 20日(土) 講演会・シンポジウム
- ・講演会のテーマ「四万十川中流域の文化的景観を学ぶ」
 - 講師 井上 典子(文化庁記念物課調査官)
 - ・シンポジウムのテーマ 「未定」
 - パネラー 井上 典子(文化庁記念物課調査官)
 - 溝渕 博彦(高知県教育委員会文化財課課長補佐)
 - 市川 敏英(四万十町町民課課長)
 - 林 三千子(元気源流大正美人の会)
 - その他未定
 - コーディネーター 大谷 英人(高知工科大学教授)
 - ・懇親会 ウェルカム広場
- 21日(日) 見学会
- 四万十川流域文化的景観・近代化遺産の見学
- 9:00 重要文化財旧竹内家住宅
- 沈下橋・大正橋
- 森林鉄道遺産
- 四万十川本流・支流
- 12:00 解散

都市計画サロンのご利用について

都市計画サロンは、支部会員の気軽な情報交換、会員間の親睦の場(サロン)を通じて、支部活動の活性化を目的として開催しています。最新的话题をお持ちの支部会員を招聘したり、遠方から講演などで来られた都市計画関係者に時間を割いていただいたりして、テーブル会議形式で、参加者が議論、意見交換する場として利用されています。

年間数回程度の開催を予定していますが、テーマ・開催地は定めておらず、時事やトピックスを扱うこともできますので、広島以外の支部各県の方もぜひ、ご活用ください。講師(会員は除く)への謝金・交通費は僅かですが、予算を用意しています。申し込み方法などの詳細については、事務局(E-mail: crrc@crcc.or.jp)またはサロン担当(石井、周藤、福馬)までお問い合わせください。ご利用をお待ちしております。

なお次回の都市計画サロンは、10月13日(土)「新しい公共」をテーマに、吉川富夫氏(県立広島大学経営情報学部学長補佐)をお迎えして、広島市市民まちづくり交流プラザで開催されます。詳しくは「今後の活動計画」あるいは支部ホームページをご覧ください。

編集後記

ラニーニャ現象の影響なのか猛暑が続いた夏が過ぎ、やっと秋風が爽やかな季節が訪れました。この中国四国支部の活動もこの夏、熱い!? イベントが目白押しで、今回のニュースレターも情報満載となりました。会員の皆さまのご協力に感謝しています。

先日、島根県益田市のまちづくりNPO やボランティアガイドの皆さんと一緒にまちを歩く機会がありました。観光名所とはなっていないものの、地元の方々自慢の歴史、自然、食、そしてたくさんの人に触れることができました。中でも司馬遼太郎の「花神」の舞台にもなり、大村益次郎が攻め上がった石州口の戦いの地では、ガイドさんの熱い案内で、まるで時代がタイムスリップ。普段は何の変哲もない小さな峠が、今にも戦士たちが駆け上ってくる劇場に早替わり。地域づくりの鼓動を感じる瞬間でした。

一方、開館から2年を迎える芸術文化拠点、グラントワ。旧時の戦士たちの鎧をも髯させる石州瓦を纏った勇姿にこれまた驚愕。歴史的資源と新しい資源が織り成す時間と空間を地域づくりの礎として活かす「ひと」こそ、今のまちづくりに求められていると感受した小旅行でした。

(周藤 浩司)

編集委員：周藤浩司(編集長)、佐伯達郎、佐藤俊雄、隅田誠、高田禮榮、長谷山弘志、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也

